

# 高次表意からみた証拠性 (evidentiality)

内 田 聖 二

## 1 証拠性と高次表意 (higher-level explicature)、メタ表象 (metarepresentation)

証拠性は、たとえば、「情報の源や陳述を述べる根拠を言語的にマークする文法現象」(cf. Aikhenvald 2004: 3 など) と定義することができ、その証左はおもにマイナー言語の分析から得られた成果に基づいていることが多い。英語や日本語では、そのような文法カテゴリーとしてまとめられる言語現象はないが、伝聞などを文字通りに表す言語表現はもちろん存在する。英語では、allegedly、as I have heard、it is said that ...、日本語では、「聞くところによると」、「伝えられるところでは」、「...とされている」、などの各種表現が認められる。本発表では、そのような言語事象を特徴づけることが可能な視点をメタ表象現象に求め、具体的には関連性理論の高次表意を道具立てとして記述することを目標とする。

Sperber and Wilson (1985) は、明示的に伝達されていることは Grice の「いわれていること」よりもはるかに豊かなもので、それを「表意 (explicature)」と呼んだ。さらに、Wilson and Sperber (1993) は高次表意という概念を導入し、それまでの表意を基礎表意 (basic explicature) として区別し、その基礎表意の上位に、発話行為と話し手の命題態度を反映する節 (clause) を設けた。

また、Sperber (2000: Introduction) は言語的に反映されるメタ表象を、心的表象の心的表象、発話表象の心的表象、心的表象の発話表象、発話表象の発話表象、の 4 つに区分した。たとえば、(1) の発話は「発話表象の発話表象」の例で、Peter が解釈するメタ表象のプロセスは (2) のように表示できる。(cf. 内田 2011、2013)

- (1) Mary to Peter: I can't help you.
- (2) [Mary said [Mary can't help Peter]]

[Mary can't help Peter] が基礎表意、[Mary said] が高次表意を表している。

## 2 外在化/内在化と証拠性

一般に、私たちの頭のなかにはたくさんの既存情報がいわば知識として蓄えられているが、その既存情報は、もともとはほかの情報源や自らの経験から得られた情報が蓄積されたものと考えることができよう。このような情報の蓄積過程を「内在化 (internalization)」と呼び、また、「外」にある情報を「外在情報」と考え、外部からの情報を内在化するプロセスの具体例として、(3) のような言語表現を仮定してみよう。

- (3) a. 新型コロナウイルス感染症は武漢が発祥地だとの報道があった。  
b. 新型コロナウイルス感染症は武漢が発祥地だと言われている。  
c. 新型コロナウイルス感染症は武漢が発祥地らしい/のようだ/にちがいない。  
d. 新型コロナウイルス感染症は武漢が発祥地だ。  
e. 新型コロナウイルス感染症は武漢が発祥地だから/なのでそこを徹底的に調査すべきだ。

証拠性という概念を援用すれば、(3) のプロセスは外部情報を明示的に伝える言語事象から、確信の度合いを表すモーダルな要素を経て、自らの責任で事実として断定する段階へ至り、さらにそれを前提理由として新しい主張へと発展して述べる現象を例証しているものである。

## 3 外在化/内在化と言語事象

外部情報と内部情報がどう相互作用して言語表現にかかわっているのかについて、ここでは日本語の「たい/たがっている」を証拠性という観点から見直してみる。(cf. 内田 2020)

- (4) 私は花子と結婚したい/\*したがっている。(当該人物、情報源ともに「私」)

- (5) 太郎は花子と結婚したがっている/\*したい。(当該人物は「太郎」、情報源は「私」)
- (6) 太郎は私が花子と結婚したがっている/\*したいと言った。(当該人物は「私」、情報源は「太郎」)
- (7) 太郎は花子と結婚したい/\*したがっているとやった。(当該人物、情報源ともに「太郎」)

これらの (4) から (7) の言語事実から (8) のような制約が考えられる。

- (8) 願望表現の当該人物と情報源が一致している場合に「たい」表現が現れ、一致しないときには「たがっている」表現と共起する。

このことは、「たい/たがっている」は願望表現の当該人物と情報源が関与していることを示唆している点で証拠性現象と通底するところがあり、かつ、「暑い/寒い」、「さびしい、悲しい」、といった感覚、知覚や内面心理などにかかわる述部にも関連するものと思われる。

#### 4 According to NP と「NP によると...ということだ/としている」

この節では外在情報と内在情報の境界に密接にかかわる、英語の *according to* とそれに対応する日本語表現について、内田 (2020) を典拠に考察していく。

Ross (1970)は遂行節を仮定して‘*according to me*’が非文であることを統語的に説明したが、COCA には (9) のような例が 32 例観察され、日本語では上記の基本文型から後半の「ということだ/としている」が欠如した (10) のような表現が新聞記事にみられる。

- (9) *According to me, I should do something functional, something that should bring joy and happiness.*
- (10) 現場近くの防犯カメラ映像を入手したとする地元メディアの配信映像によると、治安部隊は負傷したデモ参加者の応急手当てにあたった救急隊員 3 人を救急車から降ろし、銃床や警棒で打ちのめした。(朝日新聞朝刊 2021 年 3 月 5 日大阪本社 14 版)

(9) のような例は、情報源の提示というより、自らの考えないし意見を表明しているものと解することができる。他方、(10) にみられる、結びの句が欠けている表現は実際に映像を確認したことからくる「既成事実化」、あるいは確認の現象といえる。すなわち、情報が外部からのものであることを明示する英語の *according to NP* と日本語の「...によると...ということだ」という表現が、それぞれ *according to me*、「...によると...だ」へと変容した言語事実は、いずれの場合も、意味論的な制約を超えて語用論的な展開が生じたことを物語っていると言えるであろう。

#### 引用文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Ross, John Robert. (1970) ‘On Declarative Sentences.’ In Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum (eds), *Readings in English Transformational Grammar*. Tokyo: Kanto Books.
- 内田聖二 (2011) 『語用論の射程』東京：研究社
- 内田聖二 (2013) 『ことばを読む、心を読む—認知語用論入門』東京：開拓社
- 内田聖二 (2020) 「英語と日本語における証拠性表現の一側面」『奈良英語学談話会論集』奈良英語学談話会, 31-46.
- Sperber, Dan (ed.) (2000) *Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. (1995) *Relevance: Communication and Cognition* (second edition). Oxford: Blackwell. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳) (2000) 『関連性理論—伝達と認知』(第 2 版) 東京：研究社出版)
- Wilson, Deirdre. and Dan Sperber. (1993) ‘Linguistic Form and Relevance.’ *Lingua* 93, 1-25.